

[成果情報名] 促成トマト黄化葉巻病耐病性品種「TY 桃太郎さくら」の収量と果実品質

[要約] 10月定植の促成トマト栽培における黄化葉巻病耐病性品種「TY 桃太郎さくら」は、慣行品種「麗容」と同等の収量・糖度を確保でき、奇形果・尻腐病等の発生も少ない。

[キーワード] 促成トマト、黄化葉巻病耐病性品種、収量、糖度

[担当] 農林技術開発センター・農産園芸研究部門・野菜研究室

[連絡先] 電話(代表)0957-26-3330、電話(直通)0957-26-4318

[区分] 野菜

[分類] 指導

[背景・ねらい]

長崎県の促成トマト栽培では、黄化葉巻病の発生により、収量・品質が低下し農家経営を圧迫している。また、一部の産地で、黄化葉巻病耐病性品種の試作導入が行われているが、既存品種と比較し、高温期の奇形果・尻腐病等の発生や収量・品質が不安定であるため、本格的な導入には至っていない。そこで、促成トマト栽培において、かん水同時施肥を利用した黄化葉巻耐病性優良品種の選定及び収量・品質安定生産技術を確立する。

[成果の内容・特徴]

1. 収穫段数5段、10段、15段の茎径は、収穫段数に係わらず、「麗容」、「TY 桃太郎さくら」は同程度で推移し、「秀麗」、「TY 桃太郎アーク」の順で細くなる(図1)。
2. 平均1果重は、1月～2月期は全品種とも150g程度であるが、3月以降は小玉傾向で推移する。品種別でみると、収穫全期間の平均1果重は、「麗容」の106gと比較し「秀麗」が107gと同程度で、「TY 桃太郎さくら」95g、「TY 桃太郎アーク」94gとやや小玉となる(図3)。
3. 可販収量は、慣行品種「麗容」849kg/aと比較し、「TY 桃太郎さくら」が875kg/aと同程度である。「TY 桃太郎アーク」は629kg/a、「秀麗」は405kg/aと低い(図2)。
特に、「秀麗」の収量が低くなる要因として、3月及び5月、6月に奇形果、裂果、尻腐果等多発があげられる(表1)。
4. 糖度(Brix)は、各品種とも収穫開始から6度以上となり、その後徐々に上昇し、全品種とも4月以降から収穫終了まで8度以上で推移する(図4)。
5. 以上のことから、慣行品種「麗容」と同程度の収量・糖度が見込める黄化葉巻耐病性品種としては「TY 桃太郎さくら」が有望である。

[成果の活用面・留意点]

1. 促成トマト地域におけるトマト黄化葉巻病発生地域で活用できる。
2. かん水同時施肥栽培における成果である。
3. 本試験は10月中旬定植での成果であり、可販収量の向上を目的とした、高温条件下(8月定植等)における安定生産技術を確立する必要がある。

[具体的なデータ]

表1 規格別収量(a当たり)

品種名	可販果収量								不良果									
	M以上		S・2S		中		小		小計	奇形果		尻腐果		その他		小計		
	(個)	(kg)	(個)	(kg)	(個)	(kg)	(個)	(kg)		(個)	(kg)	(個)	(kg)	(個)	(kg)			
秀麗	1,114	200	1,229	130	629	63	229	12	3,200	405	1,143	127	1,143	120	2,098	262	4,971	508
TY桃太郎アーケ	943	165	2,457	250	1,514	107	2,114	107	7,029	629	1,143	134	229	28	429	38	1,900	200
TY桃太郎さくら	1,543	252	3,343	338	2,400	167	2,371	118	9,857	875	686	88	229	32	200	21	1,114	141
麗容	1,971	372	2,829	268	2,000	130	1,543	80	8,143	849	1,029	110	514	56	800	81	2,343	247

M以上(>130g)、S・2S(130~80g)、中(80~60g)、小(60~40g)

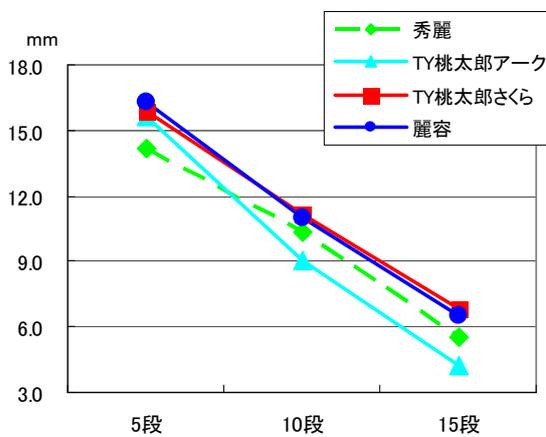


図1 収穫段数別の茎径(mm)

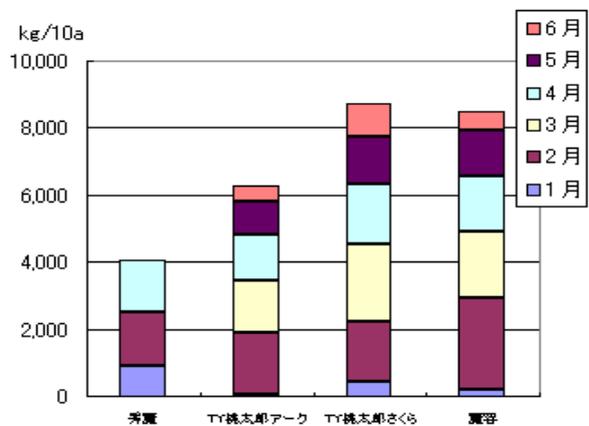


図2 月別収量(可販収量)

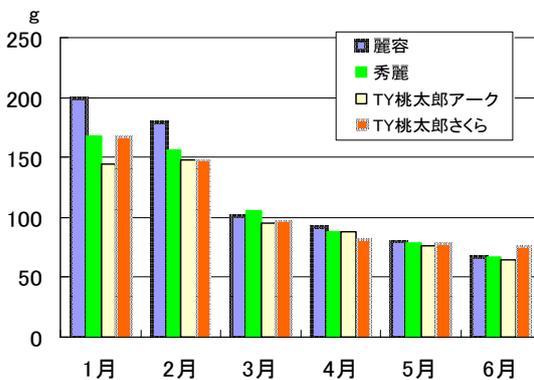


図3 品種別、月別1果重の推移

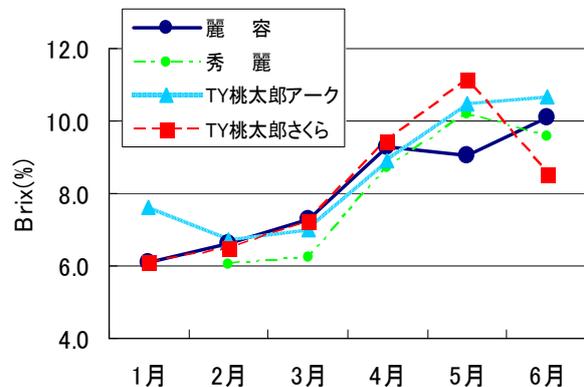


図4 糖度の月別推移

(耕種概要)

品 種：麗容(慣行品種)、秀麗・TY桃太郎アーケ・TY桃太郎さくら(黄化葉巻病耐病性品種) 定植日：平成20年10月11日

基 肥：堆肥3t、石灰資材・基肥は無施用

追 肥：タクミックスA+タクミックスB混用(倍数1,000倍、液肥開始日2月26日～、点滴かん水により2回/日)

[その他]

研究課題名：地域ブランドに向けた野菜の生産技術確立

予算区分：県単

研究期間：2006～2009年度

研究担当者：内田善朗